2013 年度の T 学生の卒論（「問題の所在」のみ）

問題の所在

遠藤辰雄氏によれば､「自尊感情とはセルフ･エスティームのことで､自分が価値ある、尊敬されるべき、すぐれた人間である感情である。」という（遠藤他、2004、9 頁）。そして、自尊感情を測る質問紙を開発したローゼンバーグ（Rosenberg,M.）や小学生の自尊感情の 5 領域を見出したポープたち（Pope,A.W.）の研究が有名である。

わが国においても、これらの先行研究を参考に自尊感情の調査研究が行われてきた。特に東京都教育委員会は、平成 20 年度から 5 年間をかけて幼児から高校生までを対象とする「自尊感情や自己肯定感に関する研究」を行い、ローゼンバーグの研究を手掛かりに質問紙を開発し、それを活用した指導実践をしている。また、荒木紀幸氏と山下政司氏は､『小学生生活の充実に関する研究』において質問紙によって小学生の自尊感情を学年や男女で因子分析を行って比較し（荒木他、1998)､『ウェルライフ（小学生・中学生・高校生）学校生活充実感』においては、小学生から高校生までを対象に学校内での不安が自尊感情にどのように影響を及ぼすかを考察した（荒木、2003)。東京都や荒木氏たちの研究は、児童生徒の学校生活や授業等に着眼しており、集団宿泊活動だけを対象とした自尊感情の研究ではない。また、吉田達也氏は、複数クラスを対象に学級内の教師の意図的介入による自尊感情の高まりを考察し（吉田、2004、55-61 頁)、村崎良平氏たちは、学級内における構成的グループエンカウンターを活用した自尊感情の高まりを明らかにしたが（村崎、2013、317-325 頁)、これらは学級内を対象にしており、集団宿泊活動には着眼していない。

集団宿泊活動の教育的意義については、坂本昇一市によると､「集団宿泊活動では、一人ひとりの子どもが、一人の例外もなく、個性を伸長して、自己実現を達成し、自己存在感や自尊感情を持つことが可能になる」（伊藤他、1986、135 頁）と述べ、集ー団宿泊活動を実施している京都市教育委員会の「山の家・ボランティアリーダー養成講座」のマニュアルでは、客観的調査に基づく教育的効果で「本人に関して、探究心・思考・判断力・自尊心・自立心のすべての項目で直前より効果の向上がみられる」（京都市教育委員会、2012、3 頁）と記しており、自尊心向上が期待できるように思われる。

以上のように、集団宿泊活動を研究した論文は散見される。自尊感情への影響を考察した調査を行っているが、自尊感情の変化については明確にしていない（京都市教育研究会他、2012)。「山の家」での児童活動に焦点化した藤村法子たちの研究でも、「生きる力」に着眼したアンケート調査しか行っていない（藤村法子他、2012)。生きる力と

コメント [A1]: 「問題の所在」とは、卒論テーマに関する先行研究を整理しながら、研究を行う意義づけをします。内容にそって段落に分けて、読みやすい長短の段落で変化もあります。

コメント [A2]: 遠藤辰雄たちの共著書の場合、姓と「他」を付す。

コメント [A3]: 欧米の人の引用では、最初に姓を記し、その後、カンマを付けて、ミドルネームやファミリーネームを記します。

コメント [A4]: ここでは荒木氏の図書全体に言及しているので、頁は不要です。

コメント [A5]: 引用を記す方法は、（姓、出版年、頁）の順で記します。なお、出版年は西暦とし、「年」は不要です。

コメント [A6]: 根拠資料が弱くて、断言しにくい場合には、「思われる」と記します。ただし、「思われる」を多用すると、締りのなり文章になりますので、要注意。

コメント [A7]: 先行研究を調べた自身があるから、このように断言できます。

2013 年度の T 学生の卒論（「問題の所在」のみ）

は、『学習指導要領解説　総則編』によれば、「確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する『生きる力』をはぐくむこと」（文部科学省、2008、1 頁）であり、自尊感情は、生きる力の中の「豊かな心」に含まれるように思う。したがって、本稿では、集団宿泊活動が生きる力の重要要素である自尊感情にどのような影響を及ぼすのかということを明らかにしたい。

引用文献

荒木紀幸・山下政司(1998)「小学校生活の充実に関する研究－自尊感情・学校内不安を手かかりにして－」『日本教育実践学会　第 1 回大会発表論文集 1 』岡山大学。

荒木紀幸(2003)『ウェルライフ(小学生・中学生・高校生)学校生活充実感－診断と指導－』柴原出版。

伊藤俊夫・坂本昇一(1986)『集団宿泊活動の展開』ぎょうせい。

遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(2004)『セルフ・エスティームの心理学』ナカニシヤ出版。

京都市教育委員会　花背山の家主催事業(2012)『平成 24 年度　ボランティアリーダー養成講座マニュアル』京都市教育委員会。

藤村法子・水野雄希(2012)「『生きる力』を育む長期集団宿泊体験活動－その効果と課題－」『京都教育大学教育実践研究紀要　第 12 号』。京都教育大学。

村崎良平・笹山龍太郎「児童の自尊感情を高める教育的実践研究」『長崎大学教育実践総合センター紀要　第 12 号』長崎大学教育学部。

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領　総則編』。

吉田達也(2004)「自尊感情の変容に関する実践的研究」『生活体験学習研究　第 4 号』日本生活体験学習学会。

コメント [A8]: ここでは「ように思う」と述べておいて、本論でその成否を述べます。

コメント [A9]: 「問題の所在」では、本研究を行う目的を最後に述べます。

コメント [A10]: 引用文献は、著者名、(出版年)、図書名『』又は論文名「」、出版社の順で記します。頁は不要です。なお、引用文献を並べる順番は、五十音順とします。

コメント [A11]: 2 行にわたる場合には、1 コマ空けてください。